

Latvija

Dievs, svētī Latviju!
Lat-viju,
P Dievce

日本ラトビア音楽協会ニュース

第3号
(2005年11月20日発行)

日本ラトビア音楽協会事務局

〒229-0014 神奈川県相模原市若松1-14-10 遠藤税理士事務所内
Tel 042-745-3334 Fax 042-740-4725
E-mail 0424668801@jcom.home.ne.jp

発行代表者 加藤晴生

〒277-0823 千葉県柏市布施新町2-18-9 Fax 04-7132-5423
E-mail katohr@earth.ocn.ne.jp

編集代表者 徳田浩

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-31-6-504 柔道新聞編集室
Tel・Fax 03-3203-0363
E-mail htoku@pastel.ocn.ne.jp

ラトビア最新情報

当協会に大きな期待を寄せられていることを実感しました

専務理事 加藤 晴生

当協会は去る9月に創立一周年を迎えました。

私は現地側への挨拶を兼ねて早稲田大学グリークラブのバルト演奏旅行に同行、学生より一日早く10月9日にリーガ入りしました。空港には深夜にも拘わらず、カットイ先生、ジントラスの指揮者アイラさん、6月まで日本で活躍していたオレグさんが出迎えてくれました。空港ビルは2年前より更に拡充され、飛行機を降りてからイミグレーションまで結構歩かれました。

先ず感じたのは、ラトビアは急速に姿を変えていることでした。銀行の大きなネオンサイン、自動車の増加と渋滞（日本ほどではありませんが）…、かつてはなかったことです。旧市街の修復も進んでいます。

日本との交流もどんどん密になっているようです。私の到着した前日にはサッカーの親善試合があり、9月末には沖縄の太鼓のグループが来訪、そして10月30日には国立劇場で能の公演があるとのことでした。初めてラトビアを訪れた92年頃は、日本人の来訪者は年間精々50人と聞いていました。

私は92年から昨年を除いて毎年訪問していますが、今回も多くの方々とお会いし、この国の文化・音楽関係者たちが当協会の動きに関心を持ち、大きな期待を寄せていることを実感しました。また、私たちの活動の実態を知り、これなら自分たちもスタートできるとの思いをもった様で、ラトビア・日本音楽協会の実現も遠い話ではないとの感触を得ました。

学生たちの演奏会はいずれも満員の盛況、特にラトビア人協会での演

奏会には音楽界の錚々たる方々がお見えになりました。その中には自らも合唱経験を持つベルジンシュ前首相もおられました。グリークラブは期待をはるかに超える演奏をしてくれて客席からブラボーの連呼、現地の人々は日本の歌を堪能してくれたと思います。天候にも恵まれ充実した旅行が出来たと思っています。

来日経験2回の同国を代表するアマチュア女声合唱団ジントラスは元気いっぱい健在です。今回もグリークラブの受け入れに協力してくれました。2007年には創立60周年を迎えますが、海外の友好団体を招く計画を立てています。同年には世界合唱フェスティバル開催の計画もあります。2008年の歌の祭典の具体的なプランは11月には決る見込みです。また、同国が生んだプリマドンナ、イネサ・ガランテ来日の話もあります。両国の音楽の紹介、指揮者、演奏家をはじめ両国民の文化的交流等など、夢は実現に向けて動き始めたようです。

リーガ大聖堂合唱学校を訪問

翌10日朝、カットイ先生と共に、先ず来年1月に松原千振氏が日本の歌を指導するリーガ大聖堂合唱学校を訪ね、ヤーニス・エレンシュレイト校長先生や、音楽監督兼指揮者のアイラ・ビルジーニャ女史などと面談しました。教室に行くとマスタークラス25～6人の少女たちが待っていてくれました。花束を貰い、素晴らしい合唱を聴きました。アルトがよく響き、ジントラスが初来日した時、日本の合唱ファンに衝撃を与えたことを思い出しました。

この学校は1年生から12年生までの小中高一貫教育校で、生徒数は約

180人。音楽の他、一般教科も怠りなく指導しています。もちろん音楽文化に重点を置いていますが、どこかの大学にでも進めるよう一般の学校と同じような教育を行っています。実際、数学、物理学の優秀な生徒もいました。

合唱学校は歌うだけではなく、ピアノ、バイオリンなどの楽器も必修です。最近ではサクソフォンが人気とか。私の前で、コンクールに入賞した7年生と8年生の2人がサクソフォンを演奏してくれました。声楽部門で入賞したというソプラノの少女はとて立派な声でした。子供たちはコーラスを学ぶだけではなく、オペラに出演したり、国賓の前で歌ったり、海外演奏旅行にも出かけます。

今年からジャズのコースも誕生し、世界ジャズ学校連盟にも加盟しました。ラトビアでは初めてのことでありますが、トップ級のジャズマンを招待して指導を受け、子供たちに大変人気があるようです。

松原千振氏が指導する日本の曲の練習も始まっていましたが、子供たちは「日本語の発音に違和感がなくなった」と話していました。

その後も話が弾み、日本と交流を深めたいという大きな期待を強く感じました。

文化大臣らと面談

女性文化大臣のエレーナ・デマコヴァ氏とは11日に会いました。いまラトビアで最も人気のある大臣です。予算会議で超多忙の中、時間を割いてくれました。二国間の文化協力は民族間の理解を深め経済協力の基礎になる大切なことと当協会を評価しました。今はまだ日本にラトビアを代表する機関がないが、大使館が出来たらいろいろな活動が始まると話していました。

※文化大臣との面談は、当地のニュースエージェンシー「LETA」にも紹介されました。（別掲）熊谷会長のメッセージに丁寧な返事も頂きました。

作曲家連盟のウギス・ブラウニス会長は、ご自身の作品が日本で演奏されたこともあり、日本と欧州との文化交流の歴史を説きながら、当連盟の今後のあり方、展開について話してくれました。日本の作曲家たちがどんどん立ち寄って、連盟内の小



デマコヴァ文化大臣と面談

さなホールで演奏して欲しい。外国の専門家にラトビアの若者を接触させたいとのことでした。古典から現代音楽、アニメ、舞踏、更に陶器にまで話が及びましたが、中でも音楽学関係の人材交流を強く期待していました。作曲家連盟の会員数は104名、作曲家と音楽学者が各々半々です。※帰国後、作曲家連盟会長から次のメールを頂きました。

「加藤様 ラトビア音楽連盟で貴方とお目にかかれた喜びの気持ちをも一度お伝えしたいと思います。私たちは建設的な話し合いをしたと思います。そして、その後の（早稲田の）演奏会は私たち両国と音楽家たちの本当の友情を示した素晴らしいものでした。音楽協会の将来の展開について素晴らしいお考えを話して頂きありがとうございます。将来共同で仕事出来ることを楽しみにしています。ウギス・ブラウリニシュ」

◇

滞在中、アイナ・カルンツイエマ：ラトビア音楽アカデミー教授（バツハ協会会長）、ヤニーナ・ティシュキナ文化省国際関係部長、ヤングリダ・レイマンドヴァ外務省アジア・アフリカ・大洋州部上級デスクオフィサー、田中亨在ラトビア臨時代理大使、グナル・リュングダール・リーガ経済大学副学長、アルマンズ・ラビンシュ・ラトビア音楽アカデミー副院長ら多くの方々、アンドリス・ベルジンシュ前首相にお目にかかりました。バルトを知るための旅行とか、楽譜の発行とか様々な提案に対処するため、旅行会社や出版社にひと通り挨拶に伺いました。落着きましたら一つ一つ検討します。



右端・ブラウリニシュ作曲家連盟会長、2人目・カットイ先生



迎えてくれた合唱団の少女たち



右からエレンシュレイト校長、筆者、アイラ・ビルジーニャ女史

一層の文化交流を

在ラトビア日本国大使館

臨時代理大使 田中 亨



10月11日、当地リガのラトビア協会において行われた早稲田大学グリークラブの公演では、当地のジントルス合唱団も参加し、本当に素晴らしい歌が次々と披露され、会場満席の観客を魅了しました。私もかつてウィーンにおいて日本大使館の文化センター所長をしたこともあり、音楽は聞き慣れておりますが、観客が万雷の拍手を寄せる姿には感動しました。その拍手は本当に心のこもった暖かさであり類ないものでした。早稲田グリークラブの皆さんが、毎年海外との音楽を通じた交流を着実に推進されているご努力に心から敬意を表します。

早稲田グリークラブは1993年、独立直後のラトビアにおいていかなる日本の団体よりも早くからラトビアの卓越した音楽の才能を発見して交流の活動を始め、これまで何回も継続的に当地を訪問しました。ラトビアはこと合唱や歌の分野となるとヨーロッパ随一の大国であり、現在ウィーンの国立オペラ座で活躍しているエリィー

ナ・ガランチャ、ドイツに住んで活躍しているイネッサ・ガランテなど名歌手を輩出している国です。早稲田の人々がそのようなラトビアの歌唱における真の実力をよく洞察し、音楽を通じた交流関係が一層深まっていることを嬉しく思っております。また10月8日には日本とラトビアのフットボール親善試合が当地で行われ日本に同時中継されました。このような様々な交流を通して、互いに友好と知的な地平線を広げることは何よりも大切なことです。本年、ラトビアは日本に大使館を開設する予定であり、現在準備に奔走しておりますが、明年春には何らかのお披露目をしたいとしています。日本に大使館ができれば早稲田とラトビアとの交流はもっと細やかで緊密なものとなろうかと存じます。両国の歌を通じた交流が今後とも早稲田の若人を通じて、一層深まることを本当に心から期待しています。

に聞き入りました。歌い終わるとヤンヤの拍手、上級生たちの口笛…。予想してなかった山本さんの出現に、子供たちも山本さんに上げる花がありません。それでも1本、2本とどこからともなく出てきました。小さな女の子が自分の頭に飾っていた花輪から1本抜いて手渡した場面はとても印象的でした。ラトビア人は本当に花を愛する民族だとあらためて感じました。



今回の演奏旅行を決めた時、学生から指揮者について相談を受けました。私は予てから、日本の合唱団が美しい日本のメロディをもっと海外に紹介すべきだと思っていたので、日本の歌でプログラムしたらどうだろう。日本の歌ならその情感を伝えるには山本健二さんがベストだと話しました。運よく演奏旅行の期間中だけ彼のスケジュールが空いていました。

学生には何でも手伝うけれど、決めて実行するのは君たち自身だと常々話していました。しかし、現実にはそんなカッコのよいものではありません。ようやくお互いの意志が通い合うようになったのは8月の半ばになってからでしょうか。

グリークラブは4年間で在学中だけが現役メンバーで、次々に入れ替わる宿命を背負っています。今年の現役は六大学の演奏会を聴いた時から、これで合唱王国に出かけられるのかといささか心配でした。指揮者のパフォーマンスばかりが目立ちました。

9月末、外国人記者クラブのステージでも、顔が引きつって歌になってないのです。さすがに翌朝、学生部長に、「今まで何をやってきたんだ!」と言ってしまいました。

出発まであと10日。すぐに山本さんに、「とにかく形がつくようにしてください」と懇請しました。ご自身のステージを控えていましたが、「やれるだけのことはやってみる」と出発直前の8日にも臨時練習を組み込みました。

山本さんは、学生たちの全身全霊を彼の棒に向けさせました。11日、文化学校で会った時、「何とかなるよ…。演奏は暖かい声援もあって東京で聴いたよりぐっと良くなっていました。夜の本番も、第1ステージを急遽山本さんのソロ入りの日本の歌に変え（当初予定では第2ステージ）、いきなり聴衆をアッと言わせグリーの



現地に貼られたコンサートのポスター

ペースに引き込んでしまいました。

今回の旅行で一番良かった演奏はリガのラトビア人協会ホールでの本番で、超満員の聴衆がブラボーを連呼してくれました。リトアニアのビリニウス公演はホールの残響が大きく、学生は戸惑っていましたが、ここでも山本さんは冷静に残響を聞きながら上手く指揮をされていました。指導力、歌の上手さ、タイミングよく客を引き込む機敏さで、50年前にグリークラブを卒業した大先輩が現役を救ってくれました。



リガ演奏会の翌日、学生たちはグループに分かれてラトビア大学学生の案内でリガ市を観光、午後からはバルト最大のレンスラン、リドで交歓会を開きました。その後一行は見送りを受けてバスでリトアニアのビリニウスへ移動しました。

早稲田大学グリークラブ 第53回定期演奏会

11月27日（日）17時開演

東京厚生年金会館大ホール

①大和田佳法（学生）指揮「リーダーシャツ21」、②田中宏指揮「愛と哀しみの惚レロ」、③山本健二指揮「月光とピエロ」、④大谷研二指揮「祈りの虹」。

※男声合唱の古典的名曲「月光とピエロ」は、堀内大学の詩を“失恋を書いたもの”と捉えた新しい解釈の演奏が楽しみ。

お問い合わせ 03-3208-4100



リガ文化学校での演奏会、メンバーが民族舞踊を子供たちと一緒に踊る場面もあった

ブラボー連呼、大成功だった 早稲田大学グリークラブ演奏会

早稲田大学グリークラブのバルト演奏旅行は、東欧最古のビリニウス大学（1570年カレッジとしてスタート、1579年ローマ法王より大学として認可）の女声合唱団VIRGOの創立25周年記念祭典（10月13日～16日）に招待され、その途次にラトビアで2回の演奏会を開いたものです。当協会が後援しました。



学生たちは10日深夜コペンハーゲン経由リガに着き、11日午後1時よりリガ文化学校（日本の小学1年から高校3年までの一貫教育を行う公立学校）で約1時間の交歓演奏会を開きました。演奏会の通訳はつい先日まで日本で活躍したオレグ・オルロフ君。演奏会の前半は、校歌「都の西北」、「斎太郎節」、「月光とピエロ（唐草模様）」、「UBOJ」…。一曲歌うごとに聴衆（子供たち）の盛り上がり興奮が高まってくるのが感じられました。

ここで学校側から生徒による民族舞踊の紹介があり、一部のグリーメ

ンは子供たちと一緒に踊りました。最初は音楽が鳴らず、子供たちの手拍子だけのリズムで踊る一幕もありました。子供たちの明るく素直な雰囲気にあふれ、とても爽やかな気分になりました。

踊りのあとは子供たちの質問受け付け。「日本からどうやってリガへ来たのか?」という可愛い質問から、「皆さんは学生のプロ合唱団か?」「コペンハーゲンでは何をしていたか?」「ラトビアの印象は?（緑が多い、建物が美しい、何をとっても絵になると応えると大拍手…）」。

その後、全員で「上を向いて歩こう」の合唱。グリーが「Ride the Chariot」などを歌い、学生指揮者の大和田君へ花束贈呈。ちょっとした花束から一輪の花まで、花のプレゼントの仕方にとても好感が持てました。会場のあまりにも楽しそうな盛り上がり、指揮者の山本健二氏が飛び入りで「さくら」「浜辺の歌」を披露。先生方や子供たちも水を打ったように山本さんの日本のメロディ

日本観を作る展示会の役割

エレナ・ヴィクトローア

(ラトビア外国美術館グラフィックアート部長・ラトビア大学で日本美術史を教える)



日本の古典文化は日本だけが専有する財産ではなく、世界の財宝の重要な一部です。この文化の他国への伝播を、日本政府が政策として公的、私的機関の支援により、体系的に実現してきたことは賞賛に値するものです。この日本文化伝播事業計画には様々な形があります。例えば、日本国内においては専門家を養成し、外国での調査や音楽会、写真展、祭りなどの開催を支援します。今日はこれらの中の一つ、美術品の展示という点にだけ絞って論じます。なぜかといえば、視覚を通じた認識は容易な受容方法であり、言語というような特別な知識を必要としません。そして美術品の観覧は、音楽の演奏会やその他の興行に比べて安上がりであり、接し易いからです。人々は展示品をみてすぐに記憶し、その結果、かなり広範囲の 대중の意識の中に固定観念がたやすく植え付けられることになります。だからといって高い水準の美術展示会が存在することを否定するものでは全くありません。

ここではラトビア芸術家連盟会館で過去数年に亘り開催された多くの写真展を思い出してみるのがよいと思います。明らかにラトビア人來場者は、これら展示会の影響を受けて日本についての印象を植付けられているのです。規模の面からいっても記念すべき「日本の古代寺院や神道聖域」、もう一つは1990年代の日本経済の隆盛期に建てられた日本現代建築に的を絞った写真展、そして標示絵として認識される書道展があり

ました。

日本に対する愛情と誇りをもつ日本の芸術家のプロ精神が、多くの來場者を集め、既に固定観念に捉われていた彼らの固定観念を更に定着させたのです。こうした視点から見るとラトビア自然博物館で開催された「桜花で彩られた日本庭園や寺院の展示会」は興味深いものでした。ラトビア人写真芸術家A. Punderss氏の作品はラトビア人が抱く日本に関する印象の本質を表わしています。そこには定説とされる考え方があります。即ち今までの固定観念が新たに、ラトビア人の既に得ている視覚を通してのイメージをみたのです。日本とはどういう国なのか。必然的に日本とは神秘的で捕らえどころがなく、脆弱な、白い泡のような桜の花に覆われた国です。珍しい寺院、派手な衣服そしてエキゾチックな植物…、詩的でもっともらしいイメージが簡単に心に入り、拭い難い心象を作り出し、人々は常にその心象の繰り返し感じます。しかし、これが新しい美しさへの感性、深い共感、そして異なった趣を持つ日本について研究する欲求を拒ませているのです。

昨秋ラトビア外国美術館で三週間に亘り、日本財団と在ラトビア日本大使館の支援の下に日本の伝統的陶芸展示会が開催されました。このときに中心となった染焼茶碗、備前焼、信楽や萩焼といった重要な展示物

文化相、加藤日ラ音協専務理事と懇談 ラトビア・ニュース「LETA」掲載

大半は、日本の企業家である。

2005年11月11日、デマコヴァ文化相は加藤晴生日本ラトビア音楽協会理事長と、今後の協力のあり方を協議した。日本ラトビア音楽協会は2004年、二国間の音楽交流の促進と活発化を目的に、熊谷元ラトビア大使を会長に結成された。

デマコヴァ文化相は、同協会の貢献を高く評価し、二国間の合唱音楽の発展に関する同協会の活動計画に興味を示した。同協会は、二国間の文化協力及び二国間関係を強化するものである。デマコヴァ文化相は、「ラトビアの国際的なイメージを形成し、民族間の理解を深め、経済協力の基礎となる文化交流の発展はきわめて重要である」と述べた。同協会の会員の

同協会は、二国間の指揮者養成講座、楽譜発行、また音楽普及などの活動を開始している。

ラトビア文化省は、同協会が必要とする文化、特にラトビアの音楽に関する情報を提供していくことで、二国間の協力及び提携を深めていくことを約束した。また、ラトビア文化省は、文化省の活動の範囲外であるとはしながらも、同様の組織をラトビアにおいても結成する考えを支持した。

今夜、リーガにおいて実施される日本でも有名大学である早稲田大学男声グリークラブの演奏会は、日本ラトビア音楽協会の活動の一環である。

(ラトビア語翻訳：黒澤歩)

と、その意味するものに対する関心の低さに驚いたことを思い出します。これらの作品は柔らかで、表面は豊かに構築され、何世紀にも亘って鍛えられた複雑な製造技術、そして鑑賞者に説明を強要するほどの素晴らしい芸術性があります。観客の目は絵付磁器の滑らかな表面から離れ、これと対照的な、古代からの伝統に裏打ちされた神秘性に覆われた製品にいきます。鑑賞力のある観客は線の鮮明さまた完璧なまでの焼成技術に感嘆して、リーガにある類似展示品がいかにも劣っているか強く嘆きました。そして彼らは、製造技術、型、絵付けなどの類似性について語ったのです。つまりこれにより多くの点に於いて、ラトビアと日本の二国を分け隔てることを見つけることなく両国を結びつけるものは何か、類似点は何なのかを見出すことがで

きました。こうしたことが展示会の本当の目的ではないのでしょうか。

私は他国の異質な種類のものを賞賛するのに決して吝かではありません。固定観念に基づいた認識にも確かに多くの利点があるが同時にマイナス面もあります。とりわけ、新鮮な認識力が旧来の固定観念とぶつかり、消えてしまうということです。勿論この展望は十分なものであるとはいえません。現代アーティストの展示会についてはまったく触れていないし、展示品の評価におけるメディアの役割も扱っていないからです。しかし乍ら、新しい人たちが日本の古典文化を異なった側面から、われわれに精通させるような新しい展示会もあります。これらが我々の固定観念に量的拡大と新しい味わいと香りを与えてくれる可能性を期待するものです。(翻訳：斉藤潤子)

寄稿

遠くて近い国—日本 Japan—faraway and near ジントルス・スプリングス

(ラトビアTVカメラマン)

私にとって日本の印象はなんといっても人々です。東京の街では夕方になると人々が大きな流れのように動き、私は人々の海の中のたった一滴のしずくになったような気がしました。早朝、港を出航する小さな漁船に乗った人々は海で朝日を見ることとなります。真っ赤に燃える太陽が水平線からすばやく姿を現し、勤勉でよく働く国—日出る国—を目覚めさせます。これらの言葉を書くのは容易いことです。しかしこれらの言葉は何と正確に日本—その国土と

人々の特徴を語っていることでしよう。

私は幸せかつ光栄なことに何度も日本を訪問しています。私はラトビア・テレビの視聴者のためにビデオ・レポートを製作する目的で日本の外務省に招聘され、この美しい国を知ることになりました。私は女声合唱団ジントルスの日本コンサート・ツアーにも随行しました。稲門グリークラブと、とりわけ加藤晴生氏のご協力により、ラトビアの女性連は何度も日本を訪ね、その伝統文化、高度に発達した合唱文化、人々の心の暖かさを経験しました。

日本では人間の生活が最も高度なテクノロジーにより支えられています。日本では人々は自然に耳を傾け、人々は彼らの生活を一年の季節に調

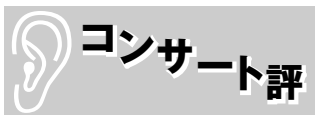
和させています。何世紀もかけて培われた伝統と近代科学の成果が共存しています。ガラスやコンクリートの高層建築がどこにでもある一方、その中庭には、日本庭園の静けさ、流水、美と調和があります。人間と自然の双方が一体となって調和しているのです。

私にはこの日本の世界と自然とのプロセスの調和のとれた見方こそが、ラトビア人の生きる知恵と共通していると思われます。それが両国の人々に親近感、共通の特徴、類似性をもたらしているのです。ラトビアのフォークソングと日本の歌はよく似ています。古典音楽から現代作曲家の作品に至る幅広いレパートリーを持つ、高度に発達した合唱文化では常により高度な演奏が要求され、

それが合唱全体の発達を促進しているのです。日本でもラトビアでも同じです。それは親近感と連帯感をもたらします。日本外務省のある人が冗談に、ラトビアと日本はたった一つの国を間に挟んだだけの隣国であると言っていました。

私は日本、その国と人々について、わが国のウルマニス前大統領が日本の天皇陛下に拝謁した際のプログラムの準備をした関係で、ビジネス、科学の分野でのトップクラスの人々を、また日常生活では一般の働く人々を、知る機会を得ました。私は常に気持ちのよい尊敬に値する人々に会いました。彼らのお陰で私の心の一部はこの遠くて近い国—日本のものになりました。

(翻訳：斉藤潤子)



東洋と西洋の見事な融合 「バルト海の国から」

タリン室内管弦楽団日本公演

小林信一

(財)合唱音楽振興会 常務理事

「バルト海の国から」というタイトルのタリン室内管弦楽団（エリ・クラス指揮）の演奏会を、東京オペラシティ・タケミツメモリアルホールと河口湖円形ホールの2夜聴くことができた。

幕開けは今年70歳を迎えるペルトの作品「東洋と西洋」。自国の偉大な作曲家に対する愛に満ちた素晴らしい演奏。ペルトは作曲スタイルがティンティナブリ様式（鈴が鳴るような和声づくり）で静謐な音楽と思っていたのだが、この作品においてはそれがもっとエモーショナルに弦楽器がヨーロッパの大河を思わせるようにテュティで鳴り響く。

次のシベリウスは「恋人」と題する美しい作品。愛するものたちの普遍的な様を3つの章に描いている。実に美しく特に一曲目の「恋人」においての多分フィンランドの民謡からの旋律だと思うのだがこのフレッシュなアンサンブルの面々が奏でる演奏にピタリとはまっていて申し分ないものであった。

三曲目のショスタコーヴィチはソリストにバルト三国ラトビア出身のまだ21才という若さのピアニスト、ウェスタード・シムクスを迎えてトランペットのソロも加わり、公演前半の音楽的盛り上がりを見せてくれた。

このピアニスト、はじめの高音のアタックの切れの良さとその粒のそろった音色の輝きは、将来の大家を十分に予想される。ショスタコーヴィチは没後30年ということもあり、オーケストラ作品も演奏される機会が増えている。やはりこの作曲家の音楽が今も光彩をはなっているということだろう。20代後半で作曲されたこの作品は、総じて主旋律はロシアを感じるものの全体明るさに満ちており、このピアニストの柔軟な音楽作りがこの作品のそういったところをよく表現していた。鳴りやまぬ拍手に応じてピアノのソロを2曲弾いて聴衆に応じていたが、いずれも小品で次回ぜひ彼のソロピアノを聴きたいと思ったのは私だけだろうか。その時はもちろんロシアや北欧の作

品は当然として、ラテン系のファリャとかグラナドスなど生きのいいリズムを弾くところを聴いてみたい。強い光の陰影をこのピアニストに感じる。衝撃的な日本デビューといっているだろう。

東京公演では休憩を挟んで後半、松下功氏の能管のソロを伴う作品が演奏されたが、これは赤尾三千子氏の繊細で鋭角的な表現に流動的な弦が重なりダイナミックな音楽を作りだしていた。作品がそのように書かれていることは間違いないのだが、歌うところは思い切り歌うこの弦のアンサンブルの表現力が作品を強く支えていた。河口湖会場ではエストニアの作曲家ペーテル・ヴァヒの、やはりこれも邦楽器、篠笛をソロにしている作品。鯉沼廣行氏の醸す音は弦楽器のアンサンブルに見事にとけ込み、作曲家の東洋と西洋の融合というテーマを具現化していた。ヴァヒの次回作は東京混声合唱団のために、やはり芭蕉の俳句をテーマに作品をすでに完成させているのだが、彼のこの作品を聴く限り東洋への深い憧憬のようなものがあるのを感じた。次回作を聴くことによりそれは確かめられるだろう。

シュニトケの、プリバード・ピアノ奏法を含んだ2つのヴァイオリンをソリストにした作品もめったに聴けない作品で秀逸。惜しめないアンコールに応じて指揮者のエリ・クラス氏はうれしいプレゼントを2曲、まずシベリウスの「哀しみのワルツ」そしてヨハン・シュトラウスの「ピチカート・ポルカ」。それぞれ聴衆と一体となった見事なフィナーレであった。（2005.9.）

コンサート “現代ラトビアの音楽”

9月23日

武蔵野市民文化会館小ホール

①室内楽の部 午後2時

ガルータ「ルークシャナ “祈り”」

ヴァイオリン：野村英利

ピアノ：藤城敬子

サルガ「人の苦しみの道」

ピアノ：甲斐万喜子

サルガ「永遠の対話」

サクソフォーン：河西麻希

ピアノ：甲斐万喜子

ヴァスクス「鳥たちのいる風景」他

フルート：安藤史子

ガルータ「ピアノ三重奏曲変口短調」

ヴァイオリン：野村英利

チェロ：任晃娥

ピアノ：藤城敬子

②オルガンの部 午後7時

ヤルマクス「ブネータス」

～オルガンのための組曲～（全曲版
世界初演）

パイプオルガン：浅井美紀
カルルソンス「ソナタ」他

パイプオルガン：湊澤久美

◇

この演奏会は当協会会員・菊地康則氏が主宰する日本ガルータ協会（ゼメネ音楽企画の主催で開催された。来日したラトビア音楽アカデミーのユリス・カルルソンス院長（作曲家）が次のメッセージを贈った。

一人の人物に、これほどのことができるでしょうか！ お互いを理解し合うということは、どれほど貴重なことでしょうか！ この不安な世界において、諸国民の友情がいかに必要であることでしょうか！

2年前、菊地康郎さんの驚くべき組織力と音楽への献身的な愛により、著名なラトビアの作曲家ルーツィヤ・ガルータのカンタータ“主よ、あなたの大地は燃えている！”が東京で演奏されました。この演奏会の反響は、日本との政治的・文化的な関わりを必要性を強調するラトビア政府にも伝わりました。

そしてつなぐは一層深くなりました。本日、私たちは東京における二つのラトビア音楽コンサート～オルガン音楽と室内楽～に、立ち会います。

菊地さんのラトビア音楽への関心は、20世紀初頭からの一世を俯瞰する二つのプログラムへと発展しました。今回演奏される音楽には、それぞれ大きな違いがあります。バルト海地域の作曲家により創造された音楽は激し過ぎる表現もありますが、瞑想的でロマンチックな傾向を備えてもいます。自然の感覚、メランコリー、強烈なイメージが劇的な対比を見せる、色彩の交錯があります。

音楽作品の創造は非常に複雑な、それと同時に根気を要するプロセスです。しかし、作品は演奏されることによって世に知られ、多くの聴衆の耳に届くことになります。それゆえ私は特別な感謝の気持ちを、コンサートの出演者のみなさんにお伝えしたいと思います。

私たちラトビア人は北欧の民族です。しかし私たちは光、魂と愛の調和への永遠も憧れを通して、日本の皆さまとつながります。私は、菊地さんのラトビア文化に対する友好、献身、そして驚嘆すべき愛情に対し、まことの感謝の気持ちを表明する名譽に浴したいと思います。

伝統と実力を実証

桜友女声合唱団・桜楓合唱団の
定期演奏会

10月2日（紀尾井ホール）と8日（すみだトリフォニー大ホール）に、二つの伝統ある実力派合唱団の定期演奏会を聴きました。共に当協会のメンバーです。桜友は共立女子大、桜楓は日本女子大の合唱団OGで構成されているだけに、メンバー同士の信頼が厚く、チームワークの良さが毎回名演奏につながっています。もう一つの共通点は両団とも素晴らしい指揮者との出会いがあったことです（桜友は大谷研二氏、桜楓は松下耕氏・藤井宏樹氏）。プログラムのポリシーは違っても、音楽と正面から向き合った意欲的なものでした。

桜友女声合唱団で印象に残ったのは、「ラウタヴァーラ／ガルシア・ロルカの詩による組曲」と委嘱作「相馬孝洋／汀」です。前者は難曲が多いことで有名なラウタヴァーラの曲でご多分に漏れず難しさを感じました。言葉もスペイン語で歌われました。このステージは現役も出演し、若々しい声に加わって音楽の輝きも増したようでした。「汀」は輪をかけて難曲で全編ピアノの抽象音楽と言える作品。言葉も音も特別な意味を持たない、まさに作曲者の言う「記憶の残滓の《滲み》」そのもので、聴いた後に深い寂寥感が残りました。この曲は昨年暮れの初演も聴きましたが、それと比べて歌い込まれた分、より深く沈潜したと感じました。文字通り名演でした。

桜楓合唱団は「木下牧子／C・ロゼッティの四つの歌」と、これも委嘱作「西村朗／《青猫》の五つの詩」が強く印象に残りました。前者は叙情味あふれる美しいメロディーが円熟した女声合唱と素晴らしいアンサンブルを紡ぎだしていました。こちらも現役有志が加わったので音楽の幅が広がったようでした。1996年の委嘱作「青猫の五つの詩」は難曲でアマチュアには荷が重過ぎるのではないかと少し心配しましたが、結果は大成功でした。初演（田中信昭指揮）は歌う皆さんがカチカチに緊張して生硬い伸びのない演奏になっていましたが、今回は伸び伸びと余裕をもって歌えたようで、膨らみのある素晴らしい演奏になっていました。この曲の良さを改めて認識しました。

両団のメンバーとは何度も混声合唱で一緒にすることがありますが、全く変わらない若々しさに圧倒されました。（大澤寛之＝早稲田大学クリーグラブOB）

音楽大国ラトビア

久元 祐子 (ピアニスト)

私が初めてラトヴィアを訪れたのは、ラトビアが旧ソ連から独立を果たした1991年4月のことでした。すでに旧ソ連はがたがたになっていましたが、国営の音楽プロモーターともいべき「ゴスコンツェルト」はまだ健在で、当時のレニングラード（現在のサンクト・ペテルブルク）などでリサイタルを行い、リガで国立ラトヴィア交響楽団と協演しないかと招いてくださったのです。この年の1月には、旧ソ連の治安部隊と独立を求めるラトヴィアの人々との間で衝突が起こるなど多少の不安はありましたが、私はお招きを受けることにしました。ラトビアがどんな国なのかとも知りたかったからです。

1991年4月11日早朝、レニングラードでのリサイタルを終えた私は、夜行列車でリガに着きました。リガは、北国の淡い春の光があふれ、メルヘンのような中世の面影を残す街並みは、静かなたたずまいを見せていましたが、言葉では言い表せない緊張を感じました。

コンサートでは、モーツァルトの二短調のコンチェルトを弾きました。モスクワ主催のコンサートでありながら、オーケストラのメンバーは「政治と音楽は別」と言い切り、素晴らしいモーツァルトを奏でてくださいました。演奏が終わると、ラトヴィアの人々は温かい拍手を送ってくださいました。花束を手渡してくれたラトヴィアの少女が、流暢な日本語で「すばらしいおんがくをありがとう」と微笑んでくれたのには感激しました。ラトビアの人々の音楽への愛情、そして情熱を、このコンサートから感じました。

ラトビアは民謡の宝庫です。古くから合唱が盛んで、コンサートがひんぱんに行われてきました。旧ソ連からの独立の時、人々は音楽祭で長く禁じられていたラトビアの賛歌を高らかに歌い、祖国への熱い想いを新たにしました。ラトビアの人々は、同時に古くからヨーロッパの音楽を取り入れてきました。1837年から39年までは、大作曲家のワーグナーがリガに滞在し、オペラを指揮しました。ワーグナーが振ったホールは現存しており、「ワーグナーホール」と名付けられています。

私が二度目にラトヴィアを訪れたのは、最初のラトヴィア訪問から十年近く経った2000年9月のことですが、

リサイタルが開かれたのがこの「ワーグナーホール」でした。モーツァルトなどの作品のほか、友人の日本人作曲家を弾かせていただきました。とてもすばらしいホールでした。リサイタルが終わった翌日、かつて衝突のあった公園に行きましたが、当時の衝突で犠牲となった写真家の名前が石碑に彫られていました。

私は、このようなご縁でラトヴィア、そしてその音楽に関わらせていただけてきました。毎年東京で行っている恒例のリサイタルでは、2002年には、20世紀ラトヴィア音楽を代表する作曲家、ヤーゼプス・ヴィートールス(1863-1948)の「ピアノのための10の変奏曲 作品6」を、日本初演として弾かせていただきました。この曲のスコアは、リガの合唱指揮者の重鎮、スクリデ氏から頂戴しました。素朴でメランコリックな詩情あふれるテーマと10の変奏からできているような情念、がっしりとしたドイツ音楽の伝統と形式、そしてなによりもラトヴィアの歌心……いろいろな魅力のあふれた名曲です。CDも出されておらず、もう一度聴きたいという声をたくさんいただきましたので、翌年のリサイタルでも弾かせていただきました。今年9月13日に、やはり東京文化会館で予定しているリサイタルでは、ヴォルフガングス・ダルツィンスのピアノ・ソナタ第2番を日本初演させていただく予定です。透明な魅力を湛えた佳作です。ラトヴィアへの想いをこめて、演奏させていただきたいと思っています。

(05. 07/21)

(追)

このほど、(株)ショパンから、「作曲家別ピアノ演奏法～シューベルト・メンデルスゾーン・シューマン・ショパン～」という本を出版「させて」いただきました。5冊目の単行本になります。

ピティナ(全日本ピアノ指導者協会の機関誌)「Our Music」に連載されました「作曲家研究シリーズ」をもとに、初めてピアノ演奏法について書かせていただきました。スコアの解釈には無限の可能性があり、作曲家の美学や発想法、作品が書かれた当時の演奏慣行や楽器、またそれぞれの作品を弾いてきた先人の思索のみ依拠しながら、自分なりの作品イメージを形づくっていくことが求められると思います。

本書は、そのような作曲家への私なりの問いかけについて、ロマン派の4人の大作曲家の作品を取り上げ

て記したものです。代表的な作品を中心に、それぞれの作風にふさわし演奏とは何かについて考えてみることにしました。

※ヤマハ銀座店、新宿紀伊国屋書店、ジュンク堂池袋本店などでも扱っていますが、事務局でも斡旋します。

久元 祐子 (Yuko Hisamoto)

東京芸術大学音楽学部器楽科(ピアノ専攻)を経て、同大学院修士課程を修了。全国各地、またヨーロッパ、ロシアなどでリサイタルを開催し、内外のオーケストラと協演。「ラジオ深夜便」などの放送番組出演、レクチャーコンサート開催、執筆活動と多方面で活躍中。

CD「ピアノ名曲の花束」「ノスタルジア」

帰国後も大活躍の
オレグさん

東京在任中、流暢な日本語で活躍したパレックス銀行のオレグ・オルロフさんが、帰国語も早稲田大学グリークラブ演奏会で通訳として相互の心の交流に貢献するなど大活躍している。

10月8日にリガで行われた日本ラトヴィア・サッカー親善試合でも、テレビ朝日系中継で日本語・ラトヴィア語の通訳を務めた。ジーコ監督の話も、ポルトガル語を通訳が日本語に訳したものを、ラトヴィア語で伝える役割を果たした。オレグさんは「ラトヴィア側報道陣はせいぜい6～7名でしたが、日本からは150名も駆けつけて驚きました。ところが折角来られたのに応援団ともども、試合後はアッという間にウクライナへ移動してしまいました。殆どのファンが仕事をしている昼間の早い時間に行われたので観客は3000人程度でしたが(競技場のキャパは6000人)、オフィスなどでテレビ観戦した人は相当いたようです。有名なジーコさんとたくさん話が出来て楽しかった」と話していた。

オレグさんは10月30日に国立劇場で行われた能の公園でも通訳を務めた。銀行マンらしい折り目正しい紳士で、ますます近くなる日本とラトヴィアの橋渡し役として一層多忙にな

「久元祐子：ショパンリサイタル」「ペーターヴェン：テレゼ、ワルトシュタイン」「モーツァルト：ピアノコンチェルト、シンフォニー」「リスト「巡礼の年第2年『イタリア』」などで好評を博する。

著書に「モーツァルト～18世紀ミュージシャンの青春」(知玄舎)「モーツァルトはどう弾いたか」(丸善出版)、「モーツァルトのクラヴィーア音楽探訪一天才と同時代人たち」(音楽之友社)ほか。

これまで毎日21世紀賞、園田高弘賞などを受賞。

国立音楽大学講師、日本ラトヴィア音楽協会理事、セレモコンサートホール武蔵野顧問。

久元祐子ホームページ「モーツァルトのピアノ音楽」(Yahoo!などで「久元祐子」と入力)。(7月よりプログラムノート掲載)



りそうだ。本紙にもラトヴィア音楽界の最新情報を伝えてくれる。

昭和8年のラトヴィア音楽祭記録
石井洋一

昭和8年11月1日発行の「月刊楽譜」第22巻11月号に掲載されたコラム「欧州楽界の話九つ」のはじめに、次のような記事を見つけました。

△エストニアで国民音楽振興。首都リガに於て此の間、国民音楽週間が華々しく開かれ同国の現代作曲家の手になる合唱曲及び器楽曲が一万五千人の演奏者によって約五万人の聴衆の面前で連日演奏された、と云ふことである。存外これが、「リガ音頭」とか云ふものならずや。

◇

エストニアとあるのはラトヴィアの間違いでしょうが、あるいは当時はエストニアだったのか？

いずれにしろ例の合唱祭の初期の報道であることに間違いのないものと思います。

事務局からお願い

1. 2年目の会費は原則として特別にご請求しませんので、年内に順次下記口座へお払い込み頂くようお願いいたします。寄付金についても格別のご高配をお願い申し上げます。

記

①東京三菱銀行相模大野支店
普通 0610501

日本ラトヴィア音楽協会 遠藤守正

②郵便振替 00260-2-43831

日本ラトヴィア音楽協会

2. 総会後の懇親会(1月下旬か2月上旬開催)を、楽しく賑やかに盛り上げたいと願っています。皆さんの演奏や隠し芸披露、景品提供も大歓迎です。早めに事務局へお申し入れください。

第2回理事会報告

9月2日 日本プレスセンター

第2回常任理事会が9月2日（金）11時から東京・日比谷の日本プレスセンターで開かれた。熊谷直博会長、藤井威・岡村喬生両副会長、加藤晴生専務理事、斉藤哲・松原千振・遠藤守正・徳田浩各常務理事、長澤護・迫秀一郎各理事とオブザーバーとして藤井副会長夫人が出席した。会長挨拶の後、次の事項が審議・報告された。

- 1、会員が17名増え、合計123人になった（当日2名入会）。協会の発展は会員増が極めて重要なので、理事・監事・運営委員は1人5名を目標に会員勧誘をお願いしたい。
- 2、松原千振指揮者（常務理事）のラトビア派遣は06年1月15日出発。22日まで滞在してリーガ大聖堂少女合唱団に「日本の歌」を指導する。ラトビアの指揮者招聘はNHK児童合唱団に「ラトビアの歌」を指導する案が浮上している。
- 3、ラトビア大使館の東京開設は少し延びて今年12月になる予定。
- 4、ラトビアの音楽を知ってもらう

ヒゲタマのダメモト精神

（髭の音楽家オタマジャクシがダメで元々の精神で世界に挑戦した）

岡村喬生副会長が自らの音楽半生を語る（協会主催第1回講演会）

9月2日

日本プレスセンタービル会議室

（抄録）

私が歌い手になった原点は母親にある。戦前、幼い頃、ハーモニカを買ってくれた。私はクラスの英雄になれた。母は外国人の先生に習った歌を歌ってくれた。家には竹の針で聴くSPレコードがあり、巷で流行っていない夢のような音楽を夢中で聴いた。漠然と音楽にも松竹梅があることを知った。母と一緒に映画館で、ディアナ・ダービンの「オーケストラの少女」を何度も見た記憶が鮮明。もっともあの頃は帰りに銀座で食べる「あんみつ」が楽しみだったが…。

私は政治家になるつもりで早稲田の新聞学科に入り雄弁会に入会するつもりだった。たまたま隣にいた学生が「お前は声が大きいからグリークラブへ入れ」と誘われたことが自分の人生を決めることになった。ひやかしのつもりで行った部室に流れる100人の男声の重厚な響きに「こんなに凄いものが世の中にあるのか！」「お前のパートは？」母が

ために楽譜の貸し出しを行う。当協会でラトビア合唱名曲選（全12巻中10巻刊行済み）を所有している。講演会活動も積極的に推進したい。キワニス例会で藤井副会長が講演し、ラトビアについてよく知ってもらうことが出来た。

- 5、会員関係のコンサート、講演会などの活動を積極的に後援して応援する。
- 6、NPO法人化を推進する。
- 7、ホームページ立ち上げを進めている
- 8、創立から8月末までの収入は949950円。内訳は会費340000円、寄付金465000円、雑収入144950円。9月2日現在の正味財産は689580円。今後は特定の事業遂行を目的にする特定基金を検討する。
- 9、オレグ・オルロス運営委員（パレックス銀行）がラトビアに帰国したが、引き続きリガに於けるリプレゼンタティブとして連絡業務をお願いする（帰国後の活動について別掲）。
- 10、2月4日以降、運営委員会を4回開催した。



ソプラノだから私もソプラノ”。本気でそう答えた。楽譜も読めない、ピアノも弾けない。しかし私は素晴らしい友人たちと一緒にグリーライフを楽しみながら必死で勉強した。3年の時、東唱（NHKのプロ合唱団）の欠員募集に応募、採用はテノール1バス1。私の人生訓とも言うべき「ダメモト」はこの時から始まった。私の歌える曲は「オンブラマイ」1曲だけ、初見演奏試験はグリー生活が役に立ち、最終面接の末、合格。NHKの人は見る目があった（笑）。

イタリア歌劇が初来日した時、「オテロ」のモンターノ役をやらないか、と…。「ダメモト」で引き受け宝塚劇場の舞台に立った。日本人として最初のイタリア歌劇出演。マル



書評

グリュース・ゴット・ウィーン2005
〈モーツァルトから小澤まで、
ウィーンを観る、聴く、歩く〉

著者：野村三郎

メロス音楽研究所代表
＝ウィーン在住

音楽と美術に絞った
ウィーン最新事情

世の中にウィーンを紹介する案内書は数え切れないくらいある。大方の本はウィーンを観光旅する人のための旅行案内である。本書は30数年にわたってウィーンの音楽、芸術に触れ、特に音楽が生活の一部となっている著者が著した音楽と美術に的を絞った案内書である。ウィーンの音楽と美術がハプスブルク家と切っても切れない関係にあることから書き起こし、現在に至るまでの歴史を解きほぐし、現在に引き継がれている遺産および現存する芸術家の活動を表面からだけでなく、旅行者では推察もできない裏面からの解説は読むものを引き付けずにはおかない。音楽史跡めぐりの章には見て歩くための道順が書かれており始めてウィーンに行く人には参考になる。音楽および美術だけでは満腹



にならない読者にとって、ウィーンのコーヒーとケーキ、ワインとホイリゲ、そ

れとウィーン料理に関する記述が食欲を満たしてくれよう。絵画、彫刻、建造物は時間を掛ければ誰でも鑑賞することができるが、一過性の芸術である音楽はチケットが取れなければ聴くことができない。最近では少量ではあるがインターネットでチケットを購入することができる。まだウィーンに行ったことない人はこの本を持ってウィーンに出かけウィーンデビューを果たし、行ったことがある人もこれまで見逃していた新しい魅力を探し出し、グリュース・ゴットと声をかけウィーンの街を堪能しようではないか。何を隠そう、この私も本書を持って今年5回目のウィーン旅行を楽しんできたばかりである。（出版社 株式会社 ショパン・電話03-5721-5525・定価1680円）

（評者 戸叶孝一＝元日本ユニシス・ロンドン駐在）

※著者、評者とも当協会会員

オデル・モナコ、ディド・ゴッピラ、千両役者の凄い力を同じ舞台で実感した。「上には上がある！」。でも、私は「上手くなって有名にならねば」と決意した。私は「自分を自惚れる天才」を自認し、単身渡欧してトゥルーズ国際声楽コンクールに優勝し、ヨーロッパでオペラ歌手としてのスタートを切った。続きは又の機会に…。

講演の中で出たエピソード

①欧州にはピアノを全く弾けないオ

ペラ歌手が多い。歌に限って言えば幼児教育はあまり役に立たない。声変わりしてからトレーニングした方が良いという意見もある。有名な少年合唱団出身の音楽家は多いがオペラ歌手は少ない。

②近年、「NPOみんなのオペラ」を主宰し、皆で作る分り易く面白いオペラ活動を推進している。昨年は「蝶々夫人」、今年は「魔笛」を公演する。皆さんも是非ご協力、ご参加を。

ラトビア大使館開設は2月に延期

前号で特報したラトビア大使館の開設は2月頃に延期になる見込みです。当協会は1月末か2月上旬に開催予定の総会に、6月をメドに大使館開設関連行事を提案する予定です。加藤専務理事と懇談した文化大臣も、これを機会に両国の文化交流を一層深めたい願っておられるようです。



イネセ・アヴァナ (ラトビア)

沖縄でチャンプルな1年間

沖縄でのチャンプルな1年間が経ちました。チャンプルとは琉球料理の一つです。豆腐と各種の野菜をミックスした代表的家庭料理です。また、“混ぜる”という意味もあります。チャンプルと同じように、この1年間、いろいろありました。出会い、発見、チャレンジ…。私は沖縄で最高のチャンプルを味わいました。

異なる国からきた私たち日研究生は仲良くなって、一緒に成長しました。来た時から日本語だけ使おうと約束して頑張ったお蔭で、私たちの日本語の力は伸びました。最初は自分が言いたいことが上手く日本語で言えなくて、逃げたくなることもありま

した。しかしいつもそばにいて励ましてくれた友達のお蔭で、勇気を出して日本語で話すようにした結果、日本語で気持ちを伝えられるようになりました。その時から日本語は音楽のように聞こえるようになりました。いろいろな国の人々と一緒に勉強でき、自分の考え方も広くなりました。それは勉強や努力や成功の味でした。

1年間は早く経ちました。きれいな思い出がいっぱいできました。泡盛工場、消防署、平和記念公園などへ見学に行ったり、友達と一緒に島を回ったり、海辺で流れ星を見たり、泡盛を飲みながらおしゃべりしたり、

歌ったりしたことが印象深く心に残っています。新しいことを発見しながら、友達と一緒にいる時間を味わいました。

エイサーのタイコの音を聞きながら、きれいな海の波を見、暑い沖縄の太陽の光を浴びて、自分のことがより深くわかってきました。沖縄で体験したこと、見たこと、聞いたこと、また、分かったことをすべて生涯忘れられないと思います。沖縄の文化や考え方などを自分の中に入れ、新しいこと、新しい自分にチャレンジできました。

でも次のさらに大きな夢は、沖縄に戻ってきて琉大で大学院として勉強することです。ラトビアではまだあまり知られてない沖縄の考え方、文化、習慣などを学び、ラトビアに

伝えたいと思います。ラトビアと沖縄の交流のチャンプルができるように心から祈っています。ラトビアと沖縄を繋ぐ橋に一石でも入れることが出来れば嬉しいです。

雪国から来た私は、沖縄の穏やかな気候と人の暖かさに触れられて本当に幸せでした。もう国に帰りたくないほど、沖縄が大好きになりました。今、沖縄での思い出が快い音楽のように心の奥で響いています。いろいろな意味で、暑い沖縄の思い出は沖縄から遠くにいても、雪国の寒い日々の中で心を暖めてくれることでしょう。沖縄に戻ってくる日まで…、思い出のチャンプルを味わい続けたいと思います。(05年11月1日) ※イセナ・アヴァナさんはカットアイ先生の教え子

当協会後援演奏会記録

ウェスタード・シムクス&タリン室内管弦楽団

8月31日 東京オペラシティコンサートホール

松下功作曲「如月に～能管と弦楽合奏のための～」

ショスタコヴィッチ「協奏曲1番～ピアノとトランペットと管弦楽のための～」他

河口湖円形ホール(9月2日)、鎌倉建長寺・方丈(9月3日)でも開催。ウェスタード・シムクスは1984年ラトビア生まれの新進気鋭のピアニスト。2002年ロサンゼルス・リスト国際音コンクールなど12の国際コンクールで優勝。

久元祐子ピアノリサイタル

9月13日 東京文化会館小ホール(ヴォルフガングス・ダルツィンスのピアノソナタ他、関連記事5面)

コンサート “現代ラトビアの音楽”

9月23日 武蔵野市民会館小ホール(別掲)

早稲田大学グリークラブ リーガ演奏会

10月11日 ラトビア人協会大ホール他(別掲)



当協会はこの秋、岡村副会長演出の「魔笛」(NPOみんなのオペラ2005年公演・松尾葉子指揮)、「オスカー・エスピナ・ルイス&長沢紀子/クラリネット&ピアノリサイタル」、「横浜稲門グリークラブ第3回

定期演奏会」、「桜友女声合唱団第14回定期演奏会」、「東京混声合唱団第201回定期演奏・松原千振指揮」、「桜楓合唱団第36回定期演奏会」を応援しました。

コンサート案内

ケイコ・マクナマラ ニューイヤーコンサート ～スウェーデンより心温まるメッセージを～

スウェーデン在住で、北欧、日本をはじめ世界中で活躍中のピアニスト、ケイコ・マクナマラさんがスウェーデンのフォークソングをアレンジして、ジャズのノスタルジックなサウンドを披露する。

06年1月28日(土) 19時開演
サントリーホール小ホール
料金5000円(全席自由)

コークレ・アンサンブル (ラトビア) “琥珀音楽団ジータリ” コンサート2005

2005年12月2日(金) 19:00
紀尾井ホール

(S) ¥4500 (A) ¥4000
主催/NPOカルチャー・リンクス
03-3585-0486

12月3日(土) 18:00
越谷サンシレイ・コミュニティセンター小ホール

主催/AC「森の風」048-976-4905

コークレ(KOKLE)は、バルトで生まれた古楽器で800年以上にわたり人々から愛され、いまでもその優しく澄んだ音は独特の輝きを続ける。

コークレ・アンサンブル “ジータ

リ(琥珀音楽団)”は、ラトビアのバルドンで、現在も音楽監督をつとめるヴァルダ・バガスによって1991年に結成、メンバーはバルドン音楽学校卒の演奏家を中心にした20代の

琥 珀

早稲田大学グラーフクラブのリガ演奏会は大成功だったようだ。音楽を通じた若い世代の国際交流は限りなく価値がある。学生たちが体験したことや味わった感動を、これらの人生の糧にして欲しい▼ラトビア側が製作したポスター(2面掲載)が素晴らしく、懇意にしている若いデザイナーも激賞していた。演奏旅行に同行した加藤専務理事によると、ヘッドコピー「TIK TĀLU-TIK TUVU」は直訳すると“遠いものが近くにある”という意味で、“日本は隣人である”という思いをポスターに表現して今回の演奏会のテーマにしたという。哲学的な香りさえる深い意味を秘め、ラトビア人がとても愛好する言葉だと聞いた。ラトビアに同じ題名の曲があって、演奏会第2部の最初にジントルスとリガ大聖堂少女合唱団が合同で演奏したが、歓迎の心はもちろん、彼女たちのこの演奏会への思い入れ・感銘が伺える気がした。最後は彼女たちとグリークラブと一緒に、両国を代表する合唱曲「遙かな友に」「風よそよげ」を演奏した。早稲田の学生たちもポスターにある「TIK TĀLU-TIK TUVU」の心を実感したに違いない▼本紙に寄稿文を寄せたスプリングスさんのタイトルも「遠くて近い国—日本」。文中

にある「ラトビアと日本はたった一つの国を挟んだだけの隣人」が印象深い。日本の外務省にもなかなか洒落た言葉を口にする人がいる。藤井威副会長のようにひたむきにアトビアを愛し、日本とラトビアを近くする努力を続けた優れた大使がいたせいかもしれない▼グリークラブ演奏会があった数日前に、リガで日本とラトビアのサッカー親善試合が行われた。テレビで生中継され、チラッと懐かしい町並みも写った。日本のゴールデンタイムに合わせて、ラトビア人の生活環境に合わない昼の早い時間に行われたが、ラトビアが健闘して引き分けた。嬉しくなって自分のスポーツコラムでも絶賛した。日本から報道陣が150名もリガ入りしたらしいが、ラトビアの素晴らしさを伝える記者は殆どゼロで、1、2の小さな記事も外的内容だった。“折角の親善試合、日本選手の動きを伝えるだけではなく、訪問した国の素晴らしさを伝えることも記者の責務”とも書いた▼日本に大使館が開設されれば、政治経済面でも日本とラトビアはますます近くなる。大使館開設に深い祝意を表し、我々も音楽を通して「Latvia—faraway and near」を、日本の多くの人に知ってもらえるような活動を目指したいと強く感じた。

(徳)

日本ラトビア音楽協会 会員名簿

(05年11月1日現在)

※ の方々が新しい入会者です

日本ラトビア音楽協会のご案内

当協会は2004年9月17日に、各界の方々賛同を得て正式に発足し、早くも1年が経過しました。演奏会、講演会、親睦会などを通じてラトビア共和国との交流を深め、同国の合唱関連情報・楽譜を収集して公開する活動にも取り組んでいます。多くの方々に加わっていただきますようご案内申し上げます。

入会お申し込み

【年会費】

正会員 個人5000円

法人10000円

賛助会員 5000円(個人・法人とも)

ご希望の方は、日本ラトビア音楽協会事務局(1面題字右に掲載)へ、ファクスかEメールでご連絡ください。入会申込書と会費払い込み用紙をお送りいたします。

情報断片

〇…前号で紹介した黒澤歩さんの著書「木漏れ日のラトビア」を、当協会が特別価格2200円(税込)で販売しています。ぜひ一読ください。お申し込みは11月末までに加藤専務理事宛ファクス(03-3568-7229・04-7132-5423)で。

〇…早稲田大学グリークラブの若者たちがラトビアで素晴らしい音楽交流の役割を果たしてくれました。指揮者として同行した山本健二氏は、彼自身も日本の歌を歌って好評を博したようで、ラトビアで感銘を受けたという女性聴衆が、リトアニアまで追っかけて民族楽器をプレゼントしたとか。早稲田グリー私の同期で、学生時代から抜群の音楽性と歌唱力を持った男でした。指揮者として活躍する他、これまでにCD「山本健二歌唱アルバム」を21枚製作し319曲をリリースしています。11月26日(土)14時から銀座ヤマハホールで21回目にリサイタル「北原白秋生誕120年と終戦60年に思う」を開きます。お問い合わせはヤマモト音楽事務所(03-3664-0228)へ。

〇…当協会は早くも2年目に入りました。このほど加藤専務理事がラトビアを訪問しましたが、当協会への期待はますます高まっているようです。会員相互の親睦・友好も深まっています。各位の活動予定、短信などを編集室へお寄せください。ホームページも間もなく立ち上がる予定です。来年1月末か2月に開催予定の総会・懇親会に賑々しくご参集ください。懇親会を盛り上げようご提案をお待ちしています。(徳)

(氏名)	(県名)	(所属)
安斎 眞治	千葉	早稲田大学グリークラブOB会 副会長
池上 隆一※	東京	
石井 洋一	東京	早稲田大学
石川 晴彦	東京	(社)出版文化国際交流会副会長
石川 了	東京	東北新社／クラシカ・ジャパン
石原 祥弘	千葉	早稲田大学グリークラブOB会
石坂 廬	神奈川	笹川平和財団
磯部 光正	東京	早稲田大学グリークラブOB会
板垣 忠直	福島	福島県芸術文化団体連合会副会長
伊東 一郎	埼玉	早稲田大学文学部教授
稲山 輝機	神奈川	毎日新聞／専務取締役
今澤 哲朗	東京	東京稲門グリークラブ／幹事長
岩崎 朋子	東京	(株)巣巣／代表
梅原 由紀子	大阪	コーロ・ヌオーヴォ
額原 信二郎	東京	早稲田大学グリークラブOB会
遠藤 守正	神奈川	遠藤税理士事務所
岡村 喬生	東京	オペラ歌手
小川 翠	神奈川	邦楽演奏家
小山田 安宏	東京	日本水路協会
オレグ・オルロフ	ラトビア	パレックス銀行／アシスタント・マネージャー
加藤 登紀子	東京	歌手
加藤 晴生	千葉	平成ビジネスアソシエイツ(株)
角谷 仁	兵庫	かどたに内科医院／院長
金岡 隆	神奈川	早稲田大学商議員
神郡 克彦	東京	長崎大学教授
菊地 康則	東京	日本ガルータ協会代表
工藤 悠一郎	東京	東京稲門グリークラブ／指揮者
熊谷 直博	東京	(元)駐ラトビア日本国大使
黒沢 歩	ラトビア	ラトビア語翻訳家
黒澤 幸男	東京	くらしき作陽大学音楽学部教授
ケイコ・マクナマラ	東京	歌手
小磯 明	東京	日本ラトビア協会理事長
耕納 邦雄	東京	早稲田大学グリークラブOB会
小林 晃	東京	日本大学教授
小林 信一	東京	東京混声合唱団業務理事
小松原 なる	東京	声楽家
斎藤 哲	神奈川	日本経済新聞社社友
坂田 知子	福島	スコラカントルム福島／マネージャー
坂場 孝之	千葉	稲門グリークラブシニア会／幹事長
嵯峨山 まり子	兵庫	魚住コーラス「わかくさ」指揮者
桜井 珊子	東京	桜楓合唱団／会長
迫 秀一郎	東京	サンルートプラザ東京総支配人
島田 精一	東京	住宅金融公庫総裁
清水 卓爾	東京	東京稲門グリークラブ
清水 信行	神奈川	三井物産(株)／(元)常務取締役
清水 貴	東京	(株)アイラス／取締役
清水 光子	東京	国立楽器
下田 博郎※	東京	慶応義塾ワグネル・ソサィエティ男声合唱団三田会 会長
ジャンネット・スードニツェ	東京	パレックス銀行／東京事務所長
白井 克彦	神奈川	早稲田大学総長
菅谷 信雄※	東京	(有)マーキュリー物産
杉浦 保友	千葉	一ツ橋大学教授
鈴木 健三※	神奈川	
鈴木 秀洋※	東京	
鈴木 洋子※	東京	
関口 教和	東京	稲門グリークラブシニア会
武内 正	東京	武内公認会計士事務所
舘野 美久	東京	国際臨海開発研究センター
田中 宏	山形	日本のうたをうたう会
田摩 勇	千葉	NHKエンタープライズ
筑紫 哲也	東京	ジャーナリスト
辻田 行男	埼玉	辻田建設事務所

土屋 昌也	東京	稲門グリークラブシニア会
戸田 智子※	東京	富士通
徳田 晶子※	東京	前青山学院大学
徳田 浩	東京	柔道新聞編集長
富永 侃	兵庫	早稲田大学商議員
長井 秀行	神奈川	横浜稲門グリークラブ
中井 弘明	東京	平成ビジネスアソシエイツ(株)常務執行役員
長澤 護	東京	早稲田大学グリークラブOB会 前会長
中嶋 勝彦	東京	東京稲門グリークラブ
永田 宏	東京	三井物産(株)／顧問
並木 恒夫※	東京	
奈良原 秀三※	神奈川	早稲田大学グリークラブOB会
西川 新八郎	東京	NPO法人顧問建築家機構
西原 義弘	北海道	北海道東川ラトビア交流協会 会長
西脇 久夫	東京	ボニージャックス
根本 保子※	東京	日本フィル協会合唱団
野瀬 一郎	東京	早稲田大学グリークラブOB会
野村 壽子※	東京	(株)ネットワーク21
野村 三郎	ウィーン	メロス音楽研究所代表
橋本 恵子※	千葉	前サンルートプラザ東京 ピアニスト
久元 祐子	東京	
藤井 明子※	東京	
藤井 威	東京	(株)みずほコーポレート銀行／ 顧問
福井 忠雄	東京	福井自動車(株)／会長
福田 美保	大阪	女性指揮者の会／副代表
藤原 桂子	兵庫	女性指揮者の会／代表
風呂本 武敏	兵庫	愛知学院大学教授
風呂本 惇子	兵庫	城西国際大学教授
堀内 啓吉	神奈川	早稲田大学グリークラブOB会
堀 俊輔	埼玉	指揮者
堀川 汎※	東京	
前田 幸子	兵庫	神戸中央合唱団
前田 二生	東京	指揮者
前波 享哉※	福井	日本ステンレス(株)
松原 千振	兵庫	東京混声合唱団／常任指揮者
松本 数馬※	東京	三井住友VISA
水谷 鏡子	東京	(有)華のハーモニー
三巻 義夫	神奈川	横浜稲門グリークラブ
三ツ松 平	愛知	男声合唱団グランフォニック／団長
宮崎 勝治	神奈川	(元)朝日新聞ヨーロッパ総 局長
宮尾 益治	新潟	新潟放送参与
宮地 和夫※	神奈川	ローガンDX
村山 喜一郎	埼玉	日本エストニア友好協会
百田 孝義	東京	東京稲門グリークラブ
八木 昌子	東京	桜友女声合唱団／責任者
山本 恭子※	兵庫	コーロ・アロードラ
山本 健二※	千葉	歌手、指揮者
山本 茂男	東京	稲門グリークラブシニア会
山本 徳行	福岡	北九州スウェーデン名誉領事
山元 淑乃	ラトビア	ラトビア大学現代言語学部東 洋学科講師
山根 秀夫	兵庫	神戸新聞会長
山脇 卓也	東京	日本無線(株)／合唱指揮者
吉田 ラスマ	埼玉	(元)外交官(ラトビア共和 国外務省)
レディー・マークス寿子	東京	作家 秀明大学教授
◇		
有限会社 巣巣	東京	
コーロ・ノーボ	大阪	
東京六大学合唱連盟	東京	
東西四大学合唱連盟	東京、京都、神戸	
神戸中央合唱団	兵庫	
北海道東川ラトビア交流協会	北海道	
◇		
アウスマ デルケーヴィツツア	ラトビア	ラトビア民族合唱祭名誉 指揮者
エドガルス カッタイ	ラトビア	ラトビア・日本協会会長
ダッチェ アダムソン	ラトビア	シンタルス指揮者
アイラ ビルジーニャ	ラトビア	指揮者